

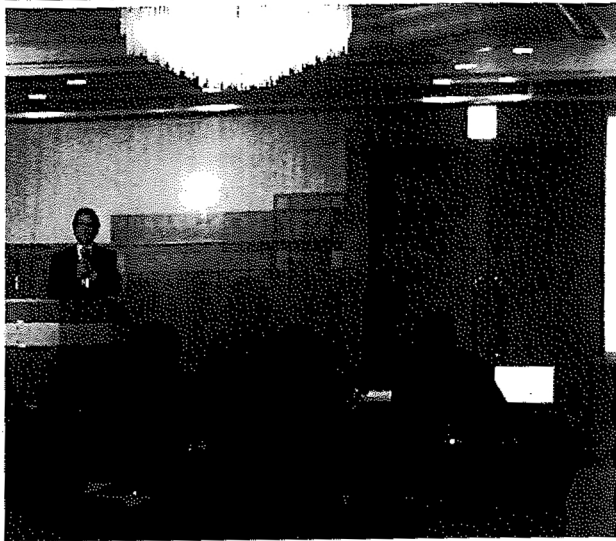
日 本 種 苗 新 聞

お好み焼き用キャベツを

青果育種研

育種から消費までを熱く論議

青果育種研究会は一月
22、23の2日間にわたっ
て「東海地方のキャベツ



お好み焼き用キャベツを提案する松本重訓館長

種苗会社圃場見学・シン
ポシウム」を開催、41人
が参加した。同研究会は
「市場会社と種苗会社の
交流機会の創出」をテー
マに毎期、農場・圃場見
学を主催しており、今
回はキャベツを取り上
げ、東海地方の種苗メー
カー4社の訪問と、オー
クラ・アクトシティホテ
ル浜松でのシンポジウム

を行った。

東海地方は冬キャベツ
の出荷量では全国の3割
強を占める大産地で、種
苗各社もキャベツの育種
に力を入れている。初日
は野崎採種場と増田採種
場を訪問した後、アクト
シティホテル浜松でシン
ポジウム、2日目はサカ
タのタネ、石井育種場の
2社を訪問、両日とも昼
食は移動中のバスの中で
取るなどハードスケジュ
ールで日程をこなした。

者に意見を求めたが、市
場関係者からは見た眼を
重視する意見が多かった。
シンポジウムでは群
馬・孺恋村の黒岩晋・J
A 孺恋村農産部官農畜産
課長が日本一のキャベツ
産地になるまでの経過や
それを維持するための苦
労、病虫害対策などの現
状について話した。また、
収穫作業の軽減化を図る
ために機械の導入も検討
したが、大きさを揃えて
的確に収穫するには「人
力に勝るものはない」と
の結論を得たという。

一方、大量にキャベツ
を消費するお好み焼き業
界のオタフクソースの松
本重訓・お好み焼き館館
長は年間を通してお好み
焼きに適したキャベツが
あれば、キャベツの消費
量はさらに伸びるのでは
ないか、と提言した。
基調講演の後、越部圓・
みかど協和会長が司会を
務め、事前に参加者から
集めた「種苗会社から参
加各業種への質問」「市
場のキャベツに関する認
識」「産地の立ち位置」
「実需者としてのキャベ
ツに対する姿勢」などに
ついてのアンケートを元
に活発で熱い論議が交わ
され、最後に宮本修・同
研究会会長が数値に裏付
けられた今後の展開を述
べ、シンポジウムを締め
くくった。